

## 研修Ⅱ 「若い教師のための基礎・基本講座Ⅲ」 国語科授業のサードステップ

### 「単元を貫く言語活動における書くことの指導」

～単元「4年生に伝えよう！私たちの委員会活動」（東京書籍5年）を通して～

#### 1 学習指導要領から付けたい力を明確にする

2学年ごとに目標が設定されていることを考える必要がある。

5・6年ではア～カの指導事項が書かれている。ア～カまでの指導事項は、学習の過程（書く行為）とリンクしているとみることができる。しかし、それら全てを1つの単元に入れることは、教師も児童も負担が大きい。そこで、単元に応じて指導事項を絞り込む必要がある。

指導事項から付けたい力を考えることが重要である。

付けたい力の考え方としては、以下の通りである。

- ・どのような内容
- ・どの順で
- ・どのくらいの量で
- ・どのような見出しや資料を使って

これらを単元を貫く言語活動と関連させて、必ず意識することが重要である。

#### 2 付けたい力にぴったりの言語活動を設定する

**付けたい力** を次のように設定した場合

自分で伝えたい委員会の仕事についてどのような構成で書けば、相手に、より伝わるか考える力

ワークショップ… 参加者が「どんな言語活動ができそうか」「その言語活動がよいと思った理由」について相互に意見交流を行う。

出てきた意見（例）リーフレット、ポスター

##### 【言語活動の吟味について】

委員会活動 Q & A ブックを作る → 構成ができあがってしまっている。

委員会活動について発表会を行う → 発表原稿を考えるとという面では、構成を考えることになるかもしれないが、成功させるためには、その他の指導が増えてしまう。

委員会活動の壁新聞を作る → 構成は考えるという面では合っている。しかし、新聞の特性からすると既成事実を伝える物であるので目的には合っていない可能性がある。

委員会活動のリーフレットを作る → どこに何を書くのかを考えるという視点からぴったり合っているであろう。だからこそ、教科書に掲載された言語活動例として載っている。

##### 【学習目標の設定】

自分の委員会の仕事について、伝えたいことが伝わる構成を考えてリーフレットに書き、4年生に伝える。

#### 3 単元を貫く言語活動の考え方

言語活動が決定したら、単元を貫く言語活動にしなければならない。

1次2次の学習が3次に生かされるというのではなく、2次の中で、個人の言語活動と

教材が何度も行き来することが重要である。

何度も行き来するために、自作教材を活用することも考えられる。教師が児童に気付かせたい事柄について意図的に提示することができるからである。

言語活動の中で、「なぜ」が生まれる単元構成を意識することで学び合い（対話）が生まれる。例えば、リーフレットのページ割りを相互交流させその違いに目を向けさせる。その際、どちらが正しいというのではなく、友だちの構成の理由を知ることによって、自分の構成を考えるようになり、思考が深まる授業を展開できる。

構成の中には、図やグラフも含まれる。それらについても内容の吟味が必要である。自作教材としてグラフを提示し、比較することができれば、構成する上での視点が明確になる。